

## 序論) 建築現場のたとえ

皆さん、おはようございます。今日も共に礼拝できることを感謝いたします。

さて、今日は最初に一つのイメージを思い浮かべていただきたいと思います。

それは「家の建築現場」です。

大きな家を建てるためには、たくさんの職人さんが必要です。大工さんがいて、電気工事をする人がいて、水道屋さんがいて、内装業者がいます。

しかし、もし現場監督もおらず、設計図も無視して、全員が好き勝手に動き回ったらどうなるでしょうか。

大工さんが柱を立てようとしている場所に、水道屋さんが勝手に穴を掘り始める。電気屋さんが配線をしようとしているのに、内装業者が壁をふさいでしまう。

これでは、いつまでたっても家は完成しません。それどころか、現場は危険な状態になり、せっかくの材料も台無しになり、最後には家が崩れてしまうかもしれません。

教会も同じではないでしょうか。無秩序にそれぞれがバラバラの思いをもって、共に集っているけども、お互いのことに配慮しない。個人主義的な礼拝を献げていたとしたら、本当の意味で【主】の家を建てあげる教会とはいえないし、聖書が教える礼拝を献げているとはいえないと思います。26 節にはこのように書かれています。

14:26 それでは、兄弟たち、どうすればよいのでしょうか。あなたがたが集まる時には、それぞれが賛美したり、教えたり、啓示を告げたり、異言を話したり、解き明かしたりすることができます。そのすべてのことを、成長に役立てるためにしなさい。

ここに私たちがどのように賜物を用い、どのように礼拝をしたらいいかの結論が書かれています。それは「そのすべてのことを、成長に役立てるためにしなさい」という部分ですね。

「成長に役立てる」と訳されている言葉は、元のギリシャ語では「オイコドメー」と言って、「家を建てること」を意味します。

教会とは、私たち一人ひとりが「生ける石」として組み合わされ、神の宮として建て上げられていく場所です。

だから、賜物を用いる目的は、自分の力を誇示するためではなく、互いに協力

し、教会という「神の家」を完成させるためなのです。

そのために私たちは共に賛美をし、みことばを教え、御心が宣べ伝えられ、様々な賜物が用いられていくのです。

では、具体的に私たちは礼拝において何に気をつけ、どのように賜物を用いていったら良いのでしょうか。そのことを教えられるために、当時のコリント教会で問題となっていた、異言と預言の使い方、そして、女性の発言について語っている箇所から、注意点と大切にすべきポイントを教えられていきたいと思います。

## 1) 異言の使い方：理解できなければ建て上がらない

まずパウロが語っているのは「異言の使い方」についてです。27 節と 28 節を読みましょう。

14:27 だれかが異言で語るのであれば、二人か、多くても三人で順番に行い、一人が解き明かしをしなさい。

14:28 解き明かす者がいなければ、教会では黙っていて、自分に対し、また神に対して語りなさい。

当時、コリント教会では、多くの人が同時に異言を語り、收拾がつかなくなっていました。しかも、その異言の意味を解き明かす人もいない状態で、誰にも意味がわからないまま、異言の賜物を持つ人が自己アピールをするかのように礼拝の中で異言を語っていたのです。

パウロは異言そのものを否定していませんが、明確な制限を設けます。それは、「二人か、多くても三人で」「順番に行い」、そして必ず「解き明かし」・・・別の言い方をすると通訳をつけなさい、ということです。

みなさんは、一度に何人の人のことばを聞くことができるでしょうか？ 聖徳太子は一度に 10 人の言葉を聞き分けることができたと言われていますが、普通の人是一人ずつ順番に話してもらわなければ意味を理解することができません。

そして、語る人が多すぎても、頭がパンクしてしまっただけでそれぞれが言っている事を消化できないでしょう。

しかも、異言は解き明かしができる人がいなければ、語っている本人さえもその意味を理解できないといいますから、教会として共に成長するためには通訳をする人が必要なのは当然のことだと思います。

礼拝は熱狂的であればそれでいいというわけではないのです。それぞれが言って

いることが理解でき、そして、礼拝者一人ひとりがちゃんとそれらを消化できる。そのような配慮がなければ、共に成長し、共に神の宮を建てあげるとはいえませんが、だから、パウロは、二人か三人で、順番に、必ず通訳者を伴って異言をするように命じています。

かといって、異言の通訳者・・・つまり、解き明かしの賜物を持っている人が必ず、教会にいるとは限りません。実際、私も、異言ができるという人には何人もお愛したことがあります。異言の解き明かしができるという人にはあったことがありません。では、解き明かしがない場合はどうしたらいいかというと、異言の賜物を持っている人は、自分に対し、そして、神に対して語りなさいと言われていきます。自分に対しというのは、異言によって自分が霊的に整えられるためということでしょう。そして、神に対しというのは、神様に捧げる祈りとして異言を用いるということでしょう。どちらにしても、解き明かし者がいない場合は、異言は個人的に【主】と交わるために用いてくのが良いのです。

ですから、みなさん、礼拝や祈祷会などで用いることばは、兄弟姉妹が成長するために意味が通じることば、ちゃんと理解できることばを用いましょう。

異言だけに限らず、例えば献身の時や司会などで代表祈祷をするとき、自己満足的な祈りをするのではなく、教会として共にアーメンできる祈りをする、また、証しも自分だけが理解できるように語るのではなく、共に礼拝する人たちが共に【主】を崇めることができるように整えて礼拝をすることが大切なのです。

## 2) 預言の使い方：秩序と吟味、そして権威への服従

次にパウロは「預言の使い方」について 29 節から 32 節で語っています。

私と皆さんで交互に読みましょう。

14:29 預言する者たちも、二人か三人が語り、ほかの者たちはそれを吟味しなさい。

14:30 席に着いている別の人に啓示が与えられたら、先に語っていた人は黙りなさい。

14:31 だれでも学び、だれでも励ましが受けられるように、だれでも一人ずつ預言することができるのです。

14:32 預言する者たちの霊は預言する者たちに従います。

パウロは異言よりも、皆が理解できる言葉で語る「預言」を重んじましたが、これにもルールがありました。

## ① 順番に語り、他の預言も尊重する

今読んだ箇所を見ると、預言する場合も「二人か三人が語り」、もし他の人に啓示が与えられたら「先に語っていた人は黙りなさい」とあります。

(30 節表示) この「先に語っていた人は黙りなさい」というのが預言の 1 つ目のポイントですね。パウロは「預言」つまり、神様からみことばが与えられて、それを語る人に対して「黙りなさい」と命じているのでしょうか。それはその神様のみことばを語る人も 32 節のようにするためです。32 節をもう一度、読みましょう。

14:32 預言する者たちの霊は預言する者たちに従います。

みなさん、預言する人も、「従う人」でなければいけないのです。神様のみことばが与えられ、それを人々に伝えることができるからといって、その人が特別に偉くなったわけでも、その人が【主】のしもべでなくなったわけでもありません。

残念なことに、現代でも有名な説教者、大教会の牧師が独裁的な指導者になって問題を起こしてしまったという例はいくつもあります。恐らくコリント教会の預言の賜物を持っている人も、語ることばかりに熱心になって、他の人からみことばを教えてもらうということを軽んじたり、嫌ったりした人がいたのでしょう。

でも、預言の賜物を持つ人は、教えるだけの人ではなく、教えられる人、学ぶ人であり、みことばから励ましを受ける人でもあるということをパウロは 31 節で語っています。

14:31 だれでも学び、だれでも励ましが受けられるように、だれでも一人ずつ預言することができるのです。

だから、預言の賜物を持つひとは、独裁的になるのではなく、自分もみことばを学ぶものであり、教えられるものであるということを何時も意識して、他の人が語るみことばの前にへりくだらなければいけないのです。

これは私自身にも当てはまることですが、同時にみなさんが日々、【主】から教えられた事を分かち合う時にも当てはまることだと思います。みなさん、例えば祈禱会の時とか、宣教区の研修会の中で、教えられた事を分かち合う時がありますよね。その時、自分が何を話すかばかりを考えるのではなくって、他の人が【主】から何を教えられたのかをちゃんと聞く姿勢をもってください。時々、分かち合いの時に自分が話す時は一生懸命に話すけど、人が話している時は、その人の方を向

くこともせず、何か上の空のような感じになっているような人がいます。それではいけないのです。みなさん、兄弟姉妹から語られる証しや、分かち合いをしっかりと聞く姿勢を持ちましょう。

## ② 吟味しなければいけない

そして、預言について考える時、さらに重要なのは、預言を盲目的に信じるのではなくって、それを聞く人は吟味するように聖書が教えているということです。29節の後半に「ほかの者たちはそれを吟味しなさい。」と書いている通りです。

誰かが「神様から語られた」と言ったとしても、その内容が本当に神様からのものか、見分ける必要があるのです。これは批判的になりなさいということではありません。神様が本当に語っておられることは何か、神様の本当のみことばを大切にしなければいけない。ということです。

## ③ ' 吟味の基準は「使徒的権威（聖書）」

では、どうやって吟味したらよいのでしょうか？ その基準が 36 節から 38 節に書かれています。36 節から 38 節を交互に読みましょう。

14:36 神のことばは、あなたがたのところから出たのでしょうか。あるいは、あなたがたにだけ伝わったのでしょうか。

14:37 だれかが自分を預言者、あるいは御霊の人と思っているなら、その人は、私があなたがたに書くことが主の命令であることを認めなさい。

14:38 それを無視する人がいるなら、その人は無視されます。

36 節の「14:36 神のことばは、あなたがたのところから出たのでしょうか。あるいは、あなたがたにだけ伝わったのでしょうか。」というのは皮肉ですね。恐らくコリント教会の中には、自分の預言こそが正しい！ 他の人がいっていることは間違っている！とか、パウロが言っていることは間違っている みたいに独善的なことを言っている人たちがいたのでしょうか。

現代でも、預言が与えられたといいながら、「多くの既存の教会が語っていることは間違っていて、自分の預言こそがただしのだ。」と主張している人がいますが、それこそが間違いなのです。なぜならば、もし同じ【主】から与えられたみことばならば、その神様のみことばが矛盾したり、対立しあったりすることはありえないからです。ちょっと聖書箇所が前後して申し訳ないですが、パウロは神様のご性質を 33 節のように語っています。

4:33a 神は混乱の神ではなく、平和の神なのです。

みなさん、神様は混乱の神様ではなく、平和の神様です。異なる預言を発して私たちに混乱させる神様ではなく、対立をなくし秩序を与える平和の神様です。だから、このお方が与える預言やみことばは一致します。

だから、パウロは預言を語る人たちに対して 37 節のように言っています。

14:37 だれかが自分を預言者、あるいは御霊の人と思っているなら、その人は、私があなたがたに書くことが主の命令であることを認めなさい。

すごいですね。パウロは「私があなたがたに書くことが主の命令であることを認めなさい。」と主張しています。これはパウロ・・・つまり、彼が【主】に特別に立てられた使徒であるから言えることばです。

みなさん、新約聖書の中でイエス様の直接の教えや行動が書かれている箇所はどこですか？ そう福音書ですね。でも、新約聖書には福音書だけではなく、多くのパウロの手紙、または、ペテロやヤコブなどの手紙が含まれています。それはなぜかというと、彼らには神様からの特別な使徒的権威が与えられているからです。

使徒とは、これは預言の賜物とは別です。【主】から特別に立てられた人たちが使徒であり、そのような権威が与えられた人だから、彼らのことばは、【主】の命令、神のことばとして認められるのです。

だから、預言を吟味するためには、やはりこの聖書のことばによって吟味されなければいけません。聖書のことばとは違うことをいっていないか、聖書の教えとの間に平和があるか、その預言によって、既に語られているみことばに対する混乱が生じないか、そのように吟味して、預言をみわけなければいけないのです。

だから、38 節にかかれている通り、既に私たちに与えられている聖書のことばを無視したような預言を語る人がいるならば、そのことばは無視しなければいけないのです。

みなさん、私も、みなさんが【主】からのみことばを受け取って、それを豊かに分かち合ってくださいることを求めます。だから、私もみなさんからみことばを教えられる耳を持ちたいと思っています。みなさんも、【主】のみことばの分かち合いに対して、聞き流すのではなく、こころを開いて聞く耳をもってください。

その上で、聞いたみことばが、聖書の教えに反していないか、聖書とは違うこと

を語っていないか、そして、聖書が教えていないことを語っていないか、をよく吟味していただきたいと思います。【主】は平和の神様です。だから、既に教えられている【主】のことばを混乱させるような言葉を聞いたならば、その預言には注意しましょう。

### 3) 女性の発言の問題：秩序を保つための配慮

そして、コリント教会にあった3つ目の問題は、「女性の発言の問題」です。34節と35節を読みましょう。

14:34 女の人教会では黙っていなさい。彼女たちは語ることを許されていません。律法も言っているように、従いなさい。

14:35 もし何かを知りたいければ、家で自分の夫に尋ねなさい。教会で語ることは、女の人にとって恥ずかしいことなのです。

この箇所を読むと、「聖書は女性を差別しているのか」と感じる方がいるかもしれませんが、しかし、誤解しないでください。パウロは同じ手紙の11章で、女性が礼拝の中で祈ったり預言したりすることを認めています。ですから、これは「女性は一切口をきくな」という意味ではありません。

ここでの問題は、当時のコリント教会の特殊な状況にありました。それはどうもコリント教会の中には、どうも誰かが【主】のみことばを語っている時に、それを遮って質問したり、それを批判したりするような女性がいたみたいです。

みなさん、預言は吟味されなければいけませんが、だからといって直情的に声をあげて質問したり、批判したりして、礼拝の平和や秩序を見出していいわけではないのです。だから、パウロは35節で「もし何かを知りたいければ、家で自分の夫に尋ねなさい」といっています。

当時の文化は、ユダヤ人的にも、ギリシャ人でも女性も公共の場で声を上げて非難したり、質問したりすることは、非常に恥ずべきことであり、未信者がつまづく原因にもなりました。だから、そのような混乱を避けるために、パウロは、「教会の秩序を壊すような発言は慎みなさい」という意味で、「女の人教会では黙っていなさい」と言っているのです。

これも神様が混乱の神ではなく、平和の神であるということに結びつきます。

みなさん、私たちはこの神様のご性質に則って、秩序ある礼拝、平和な礼拝を築

き上げるために、愛のある配慮、愛のある自制をすることが大切なのです。

## 結論) 平和の神の教会

最後に、33 節、そして 39 節と 40 節を見ましょう。

なぜこれほどまでに「秩序」が大切なのでしょう。

それは、「神は混乱の神ではなく、平和の神」(33 節) だからです。

神の家である教会が混乱していたら、世の人々はそこに神様の姿を見ることができません。

ですからパウロは結論づけます。

「ですから、私の兄弟たち、預言することを熱心に求めなさい。また、異言で語ることを禁じてはいけません。ただ、すべてのことを適切に、秩序正しく行いなさい。」(14:39-40)

神様の賜物を制限する必要はありません。熱心に求めて良いのです。

しかし、大切なのは、教会が一つの「神の宮」として美しく成長できるように、それぞれの賜物を「適切に、秩序正しく」用いていくことです。

### 【応答への促し】

説教を終わるにあたり、私たち一人ひとりの心を神様の前で点検しましょう。

あなたは「共に成長すること」を意識して礼拝に参加しているのでしょうか？

自分が恵まれることだけを求めているのでしょうか。あなたの賛美の声、祈りの姿勢が、隣の人々の信仰の助けになっているのでしょうか。

神のことばを熱心に求めているのでしょうか？

自分の感情や経験よりも、聖書の言葉を第一とし、それを慕い求めているのでしょうか。

語られるメッセージに対して、良い意味での「吟味する姿勢」を持っているのでしょうか？

「アーメン」と受け取ると同時に、それが聖書と一致しているか、真理に基づいているかを見分ける霊的な分別を持っているのでしょうか。

教会や礼拝の秩序を乱すようなことをしていないのでしょうか？

礼拝への遅刻、メッセージ中の私語、あるいは祈りの時間を妨げるような振る舞い。そうした小さな無秩序が、神の家の建設を妨げていないのでしょうか。

自分の賜物を、教会のために適切に用いているのでしょうか？

神様があなたに与えてくださった素晴らしい賜物を、自分のためではなく、教会全体の徳を高めるために用いているのでしょうか。



神様は平和の神です。

私たちの教会が、キリストを隅の親石（土台）として、互いに愛によって組み合わされ、秩序正しく、美しい神の宮として成長していくことができますように。

そのために、私を用いてくださいと、共に祈りを合わせましょう。